

氏名 SASAI Toshifumi

題目：現代生活における自然とかかわる活動の意義－丹後・丹波地方の事例検討－

本研究は、京都府北部の丹後・丹波地方で、高齢化・過疎化がみられる地域を対象に、生業の合間や生業に付随しておこなわれる自然とかかわる活動（以下では、これをマイナー・サブシステム活動または「活動」と表記する）が、その担い手の生活や、当事者が属する地域社会にとってどのような意味をもつのかを検討したものである。実態調査をもとに、地域社会を構成する他者との関係性のなかでマイナー・サブシステム活動が展開されていることを明らかにし、そこに生活の豊かさにつながる意義があることを論じた。

第1章 序論

本章では、研究の背景、目的、方法を述べ、既往研究を検討した。調査手法の参考として民俗学で蓄積されてきた自然とかかわる研究を概観し、さらに本研究に参考となる類似する研究事例を検討した。

既往研究において、マイナー・サブシステム活動に着目した研究事例は多数ある。本研究もこれに着目し、豊かな自然を残す丹後・丹波地方で、自然とのかかわりを追跡できる山間、海辺、その両方を有する地区の3か所を調査地域として選定して、「活動」を担う人びとへの聞き取りと行動観察調査をおこなった。

既往研究と対比される本研究の特徴は、マイナー・サブシステム活動の意義を、担い手である個人および集団の生活という視点から考察することにあると指摘し、本研究の位置づけをおこなった。最後に、本論文の構成について述べた。

第2章 現代生活における害獣駆除の意味

本章では、害獣駆除の実情を明らかにし、福知山市山間部で害獣駆除をおこなう兼業猟師に聞き取り調査をおこなった。

具体的には、駆除の実態を記録するとともに、駆除猟に対する意識を探るため、対話形式の聞き取りをおこなった。その結果、道具や罠の製作、また肉や骨の利用等に、「楽しみ」という猟師の精神性にかかわる要素が関与していること、害獣駆除は地域の生活を守るために必要な活動と位置づけられていること、害獣駆除によって得られる肉は、消費を目的とせず、投棄されることが多いことを把握し、そこに義務感や地域貢献への意欲という動機が存在することを明らかにした。害獣駆除は、市の補助金が支給される公益活動とも位置づけられるが、本研究では、害獣駆除に関わる当事者に着目し、地域における彼らの生活の中でその位置づけを考察することによって、そこに特有の動機と精神性があることを指摘した。

第3章 「おかずとり」の意味と共同体意識

本章では、京丹後市丹後町袖志地区を対象に、海辺の生活調査をおこなった。同地区ではマイナー・サブシステム活動と捉えられる磯漁がひろくおこなわれている。

ここでは、磯での採捕活動に「おかずとり」という言葉が用いられていることに着目し、「おかずとり」を意味する採捕の動機と伝承を明らかにした。また、「おかずとり」では採捕の資格や規定が存在し、地域の住民が総出でおこなうことから、資源の保持や安全性の確保への配慮があること、「おかずとり」の動機は「子どもの頃の体験」に遡り、親から学んだことに由来することを指摘した。さらに、採捕活動の意義として「人との交流」、「没頭」、「生活の張り合い」、「自然との対話」が語られ、採捕物や採捕活動の価値として「食物としての価値」以上に、「人に喜んでもらう嬉しさ」が活動を動機付けていることから、「おかずとり」は人びとに「楽しみ」や食生活の豊かさをもたらしていると考察した。

「おかずとり」には地域社会の規範が反映されており、活動自体が採捕者同士のコミュニケーションの場ともなって、共同体の意識が育まれていることから、これらを、地域生活における「おかずとり」の意味や活動の意義として提示した。

第4章 自然とかかわる自立自存的な生き方

本章では、宮津市由良地区に居住する高齢男性を対象に、その行動観察と聞き取り調査をおこない、自然とかかわる自立自存的な生活の特徴を明らかにした。調査者が対象者と生活を共にしつつ、その活動を農作業、調理、季節行動、漁・猟、自作道具、その他に分類して、そこにみられる工夫を指摘した。また生活調査を基礎として、行動理念を抽出し、「生活の基盤となる7要素」の概念図を作成した。

まず、生活の外周には、「自然環境」「社会環境」「経験」があり、それらと関連する「もったいない」「思い切り」「備えと蓄え」という特徴的な思考パターンがある。次に、この3つの思考パターンと結びついて、「労力」「モノ」「金銭」が「もったいない」と捉えられ、「投資」「資材など」が「思い切り」と結びつくこと、「道具類」「食料」が「備えと蓄え」の対象となることを論じ、以上7つを生活の基盤となる要素と位置づけた。さらに、行動の5要素を挙げ、それらの根底にある「他者とかかわり」「創造する力/発想と技術」「先を見据えた行動」が生活を方向付けていることを示した。

以上を踏まえて、対象者は自らで生活全体を設計し、自然とかかわる自立自存的な生き方を実践していること、またその生活は、他者への思いやりなど他者との関係性によって規定される精神性と深くかかわっていることを指摘した。

第5章 総括

本研究では、京都北部丹波・丹後地方の3地区における生活を、マイナー・サブシステム活動に着目して調査し、次のような結論を得た。

1. それぞれの地域で観察・調査した「活動」には、「楽しみ」や「共同体意識」という共通の動機や精神性を見いだせる。それぞれの「活動」の「楽しみ」や「共同体意識」は、ゲーム性、道具づくりにおける創意工夫、成果物の分配、他者との交流、また活動を担う主体の地域特有の自然への親しみや他者への信頼によって支えられている。
2. マイナー・サブシステム活動は、地域における共同体としての意識や規範を反映し

ている。害獣駆除は公益活動であり、「おかずとり」は村人全員が一定の規則のもとでかわる公的な活動と位置付けられる。由良地区の高齢者は、利他性を意識した行動原理を内面化して、自らの暮らしを整えている。

3. 調査対象地区におけるマイナー・サブシステム活動は、地域特有の自然とかかわる生活条件や資源を利用するものである。伝統的な技法や習慣が継承されるとともに、新たな工夫が重ねられ、現在に至っている。

マイナー・サブシステム活動の中には、要する労力や危険性が無視できないほど大きいものもある。にもかかわらず、これらはそれを実践する者に「楽しみ」をもたらしている。道具類の製作や活動のゲーム性はその楽しさを高め、成果物の分配や物々交換など金銭を介さないやり取りは「喜び」をもたらしている。そこではまた、交流できる他者の存在や共同体意識の存続が重要な役割を果たしている。

「活動」を可能にしている自然環境は、この活動が維持されることによって適切に管理されており、そこに人と環境との望ましい相互作用を見出すことができる。すなわち、この「活動」は、自然環境の適切な管理、地域社会における共同体意識の醸成、生活者としての主体的な生き方の実現に通じている。

以上を踏まえ、本研究では、生業の合間や生業に付随しておこなわれる自然とかかわる活動が、現代においても生活の豊かさや共同体の持続性と結びつくことを示唆し、結論とした。

以上